

女子青年の意識についての調査

—教育環境アセスメントに関する研究 第6報告—

金 平 文 二^{*}・岩 井 絹 江^{**}

(昭和62年9月30日受理)

Opinion Survey for Young Women —Study for Assessment of Educational Environment—

Bunji KANEHIRA and Kinue IWAI

(Received September 30, 1987)

はじめに

青少年の健全な育成をはかるにさいし、個人的な条件のほかに、青少年をめぐる環境的要因の影響について考慮する必要があることはいうまでもないが、最近における文化的・社会的・経済的環境の著しい変化が、青少年の意識・態度・行動などに種々の影響を及ぼし、それらの面に従来と異なったさまざまな傾向がみられるようになってきている。一例として、最近の青少年について、新人類ということばが使われているように、従来とは異なる新しい考え方や行動を示す青年の出現に、周囲の大人たちはややとまどいを感じているようである。

われわれが意図している教育環境アセスメントに関する研究では、現代の青少年を正しく理解し、その健全な育成をはかることが研究のねらいであり、それは、最近における青少年の意識・行動についてその変化の様相がどのようなものであるのかを適確に把握することが必要になるわけである。

現代の青少年の意識・態度・行動についての横断的側面の研究によって、それらの傾向を把握することは、彼等が今後実社会で生活をするようになるとき、従来とは異なる新しい生活様式がどのようなものになるかを理解する手がかりが得られることになると思われる。そして、このように青少年の行動傾向の変化の実態を的確に把握することは、青少年の理解と指導の面で様々の示唆が得られるのではないかと思われる。それが、今回われわれが実施した研究のねらいである。

I 研究の目的

最近、青年の意識・態度・行動の面において、従来とは異なった傾向がみられるようになってきているが、まずその現象面を把握することによって、その実態を明らかにするとともに、それらが何に起因するかを考察する手がかりを得ようとするものである。そのため、過去1年間における新聞記事より、青年の意識・態度・行動面に関する記事を収集し、それらについて分析を行い、その実態を把握することにした。さらに、それらの分析結果に基づいて、青年の意識・態度・行動面についての質問項目を作成し意識調査を実施し、以上の両面から青年の最近における傾向を探るためのパイロット調査として実施したものである。

II 研究の方法

研究の方法として、新聞記事による情報の収集と分析、質問紙法による青年の意識調査の両方法からアプローチした。

〔その1〕新聞記事による情報の収集と分析

1 研究の目的

青年の意識・行動に関連する記事を幅広く収集し、それらをKJ法的手法によって分類することを通して、青年の行動傾向を把握し分析することを意図した。

2 研究の方法

読売新聞縮刷版昭和61年4月から昭和62年3月までの1カ年の朝夕刊の記事について青年の意識・行動に関する記事について大小の別なく一項目としてチェックし、切り抜きをした。それらをKJ法的手法を用いて、内

* 児童学科

** 学生部

容的に類以していると思われるものに表題を付けて分類項目とした。この分類作業の結果、記事の総数は406件、分類項目は15項目となった。このような方法によって、青年の行動傾向の大枠を把握し分析するという形でデータをまとめた。

3 結果の考察

青年の行動傾向に関する内容項目は表Iのようになり、これらの項目について主なものをまとめると次のようになる。

表I 内容項目別度数

内容項目	度数	内容項目	度数
趣味・余暇の過ごし方	53	おんなの20代	14
ファッション (一般的なものを除く)	68	入試での若者の様子	10
食生活	30	下宿生活	5
結婚観	10	若者のストレス、 心の病い	5
サークル活動	31	若者からの投書	22
アルバイト	18	中高校生について	59
社会人として	55	外国の若者事情	12
就職戦線	14	計	406

①趣味・余暇の過ごし方

「音楽はCDで」、「おしゃれな遊びビリヤードに若者の人気集中」、「今、若者のやってみたいもの第1位はスキューバダイビング」、「女子大生の半数が海外旅行へ」、「大学生はダブルスクール」などの見出しで青年の趣味や行動傾向について新聞誌上にをにぎわせている。ここには今の若者、特に大学生の姿が表われており、「勉強と遊びの切り換えはうまい」、「自分の趣味・関心にあうことは真剣にやるがそれ以外は受け入れない」など一般的にいわれている「新人類」の傾向がはっきりみられる。

②ファッション

若者とファッションは今や切り離せないものであるが、新聞の社会面では男女を問わずファッション＝おしゃれの話題が多くみられる。特に最近の色に性差がみられず男女共黒が流行し、女性のものといわれてきたファッション領域に男性が大きく進出してきた。黒に対するイメージは従来、厳粛な色ととらえられ悔み事などに使われ暗

いものとみられてきたが、若者はそういう概念にとらわれず黒を「かっこいい」ととらえている。また多少汚れても平気であるという経済性も今の若者に感覚的に受けたようである。さらに、男性の化粧や男性のバーゲンあさり、男女を問わずDCブランドでの全身統一、毎朝のシャワー、レンタル衣裳の利用など、男らしさ女らしさにこだわらない価値観やライフスタイルが若者の間に広がっていることがみられる。繊細さとたくましさを含せ持つ女性、たくましさもあるが、あかくおしゃれを自ら意識する男性というアンドロジナス（両性具有）的な傾向がみられ、全体的にファッションに大きな関心を持ち、おしゃれになった若者の姿がここに顕著に表われている。

③食生活

今や若者にとっては「食べる」こともファッションの一つとなっており、おしゃれな食生活が若者の意識を表わしているといえよう。外食産業が若者の嗜好を先取りする形で、激辛食品やおもしろフーズなどの新製品を次から次へと販売し、CMで宣伝していることもブームを起す要因であろうとも思われるが、「抵抗なく飛びついていく」若者の姿であろう。また青山や渋谷など若者のおしゃれな街での「アイスクリームを食べるための行列」にスポットをあてた記事の中では「みんなが並んでいるからなんとなく」、「話題になっているから食べてみたかった」など青年いや人間の群集心理が行列を作らせるのではないかと報じている。さらに和食とワインなど従来から考えるとミスマッチな感覚のものが流行し、飽食の時代に育った若者の遊び心、感覚に受けたのだといえよう。

④結婚観

年々派手になっていく結婚式の様子がシーズンになると新聞でも多く報じられているが、「結婚も今や平均700万円の時代」、「他とは違う趣向を凝した結婚式」などの記事が目につき、他人と同じでありたくない、一生に一度のことだからおもいっきり派手という若者の意識が表われているといえよう。しかしこの反面、女性の高学歴、高収入、生きがいの尊重などから自分の意志で適齢期を選ぶ女性がふえていることや、結婚をしても夫唱婦隨の形でなくもっとライトな感覚で「お互いに自立しあう結婚生活」を望む男女が増えているなど若者の意識傾向が昔と大きく変化していることが表われている。

⑤サークル活動

今の若者(学生)を語る時サークル活動は切り離せないものになっている。正式のクラブではなく、テニスをはじめとしてオールシーズンスポーツやコンパなどで楽しむサークル活動の状況が様々な形で取り上げられている。気のあった仲間と楽しみながらスポーツやコンパを行い、交際範囲を広げていくという典型的な若者像といえよう。

⑥アルバイト

アルバイトに関する記事はあまり多くないが、学生生活調査などではほとんどの学生がアルバイトを経験しており、アルバイトの選び方、職種において現代若者の特徴が表われているように思われるので特に取り上げてみた。選択のポイントとして、大学1・2年では「センスの良さや楽しさ」を、上級生になるほど「論理・思考」を重視し、就職に役立つものを選んでいく。職種においては1・2年がヒューマン型(店員・スポーツ関係)、3年はアドベンチャー型(マスコミ・ファッション関係)、4年になるとメカニック型(コンピュータ関係)と少しずつ変化している。生活をエンジョイする中で、自分の将来の生き方を考えていこうというシッカリ・チャッカリ型の若者像がみられる。また卒業後も会社に入らずフリーアルバイターを希望する若者が増えており、多様なライフスタイルを持ちたいという新人類の意識傾向がここにも表われている。

⑦社会人として

若者の意識・行動傾向は学校を卒業し社会人となった職場での行動傾向にはっきりと表われ、新入社員意識調査報告に関する記事が新聞でもいろいろと取り上げられている。そこには“仕事は仕事、余暇は余暇、人生はソフトに”という割り切り型の若者が大部分を占めると報じられており、「背広を着た新人類」、「研修で早くも不応適」、「感性くすぐってやる気を」、「強い依存心と責任回避、仕事はプツン」、「多忙な時も平気で休暇」などの見出しで現代新入社員像が表わされている。

〔その2〕質問紙法による青年の意識調査

1 調査対象

今回の調査はパイロット・スタディであるため、本学1学年～4学年の学生に対して、いくつかのクラスを無

作為に抽出し調査対象とした。質問紙の配布数は400名で、回答数は329名となり、回収率は82.2%である。ただし、分析の対象としたのは、調査対象からの標本抽出による309名である。

2 調査の実施期日

昭和62年7月6日～7月15日の期間に調査票の配布および回収を行った。各学年において、調査対象者に調査の主旨を説明し、調査票の配布・回収を行った。

3 調査票の設計

調査票の質問項目は、多くの項目のなかからKJ法の手法を用いて選定し、内容別に分類整理して選択式の質問項目を設計した。質問分野は次のとおりである。

選択式質問(50問)

- i 大学生生活の中での満足感
- ii 余暇時間の過ごし方
- iii 個人のライフ・スタイル
- iv 将来の生き方

の各分野について、計50問で質問項目を構成した。回答方法は、別紙の回答用紙に記入させる方式とした。

4 調査結果の集計

調査データの集計は手作業によって行い、調査対象を1・2学年と3・4学年の2グループ別に、各質問項目における選択肢の度数、パーセンテージを算出して図式化し、それらの結果について分析・検討を行った。調査項目全体については、紙面の関係で掲載できないので、最近における青年の意識について特徴的なものについて図示し、若干の解釈を加えることとした。

結果の数表による表示は省略し、学年区分別(1・2年と3・4年の区分)に、質問項目についての選択肢別のパーセンテージを比較棒グラフで表示した。調査結果の概要は以下のとおりである。

- i 大学生生活の中での満足度

2 現在の大学生生活の満足度は、全体を100%とするところのくらいに値しますか。

- (1) 0～20%
- (2) 20～40%
- (3) 40～60%

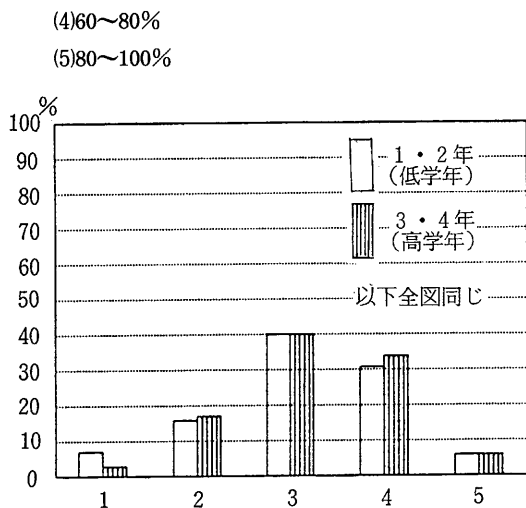


図1 学生生活の満足度

学生生活に対する満足度について、(3)40~60%とするものが低学年グループ、高学年グループ（以下L G・H Gという）とも40%、(4)60~80%とするものが31%(L G)と34%(H G)となっており、学生生活に対する満足度はかなり高いといえる。現在の学生にとっては、大学生活という環境は色々な意味で恵まれたものであり、このような結果になることは当然といえる。

3 大学に対して不満がありますか。

(1)ある (2)ない

あると答えた人は次の中から選んでください。

- ①先生に対して ②授業内容に関して
③学校の方針 ④学校の設備 ⑤その他

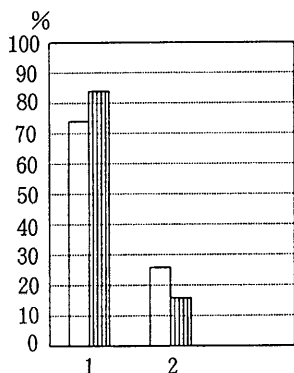


図2 大学に対しての不満

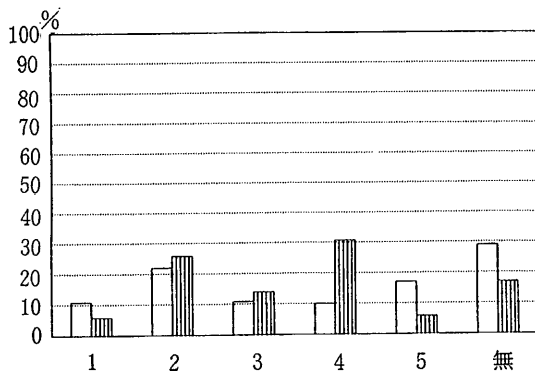


図3 不満の対象

大学に対しての不満はL G74%、H L84%となっておりかなり高い。その理由としては、②授業内容、④学校の設備についてである。大学教育の目標と学生のニーズとの間のギャップと思われるが、授業の構成や展開のしかたについての検討の必要を示唆している。大学の設備についても、学生の要求の多様化や社会環境の変化に対応して常に改善の努力を重ねていくことが必要かと思われる。

ii 余暇時間の過ごし方

8 新人類という言葉から何を連想しますか。

- (1)無気力、無感動 (2)新しいもの好き
(3)ピーターパン (4)自分達（若者）
(5)大人が勝手につけたもの (6)わからない (7)その他

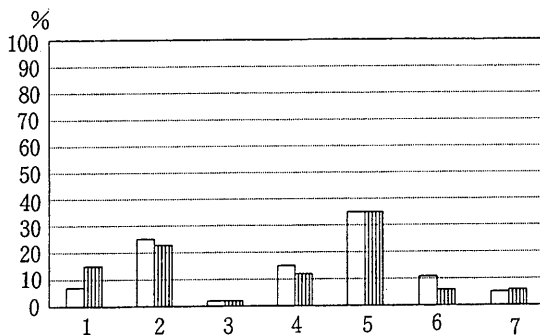


図4 新人類という言葉からの連想

女子青年の意識についての調査

現代の青年について、“新人類”と表現することがはやったが、それは(5)大人が勝手につけたものだとしており、同世代の青年にとっては新人類でも何でも無い。調査結果からは、(2)新しいもの好きを指しており、大人から見ても、現代の青年達は豊かな社会の中で、いろんな分野でやりたいことを抵抗感なしにやっているようである。

4 今一番関心のあることは何ですか。

- (1)友人(人間関係) (2)将来(就職, その他)
 (3)生き方 (4)お金(アルバイト)
 (5)趣味(スポーツなど) (6)レジャー (7)サークル

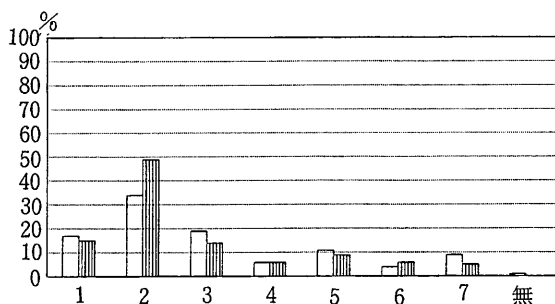


図5 一番関心のあること

(2)将来に関することに、L G34%, H G49%となっている。とくにH Gでは就職を控えているわけであるから、このような傾向は当然で学生は4年間の学生生活後には、職業生活が始まるわけで、将来のこと、生き方について関心を持つであろう。次いで、学生生活の中で最も接触の多い友人についての関心が高いが、対人関係のあり方について配慮することが多いことを示している。

10 テレビ視聴時間は平均して1日どのくらいですか。

- (1)1時間以下 (2)1~2時間
 (3)2~3時間 (4)3~4時間 (5)その他

テレビ視聴時間は、2時間以下がL G74%, H G66%となっており、映像文化の環境の中では予想どおりといえる。一番よく見るテレビ番組として、ドラマ・映画が約45%、ニュースが約15%となっており、娯楽として1日の夜を楽しむというところだと思われる。

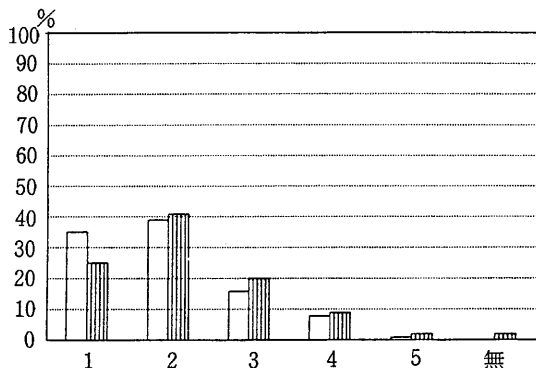


図6 テレビ視聴時間

13 睡眠時間は1日平均どのくらいですか。

- (1)5時間以下 (2)6時間
 (3)7時間 (4)8時間 (5)その他

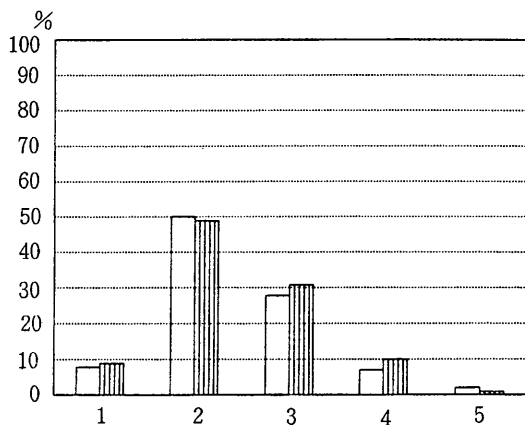


図7 1日平均睡眠時間

睡眠時間は6時間というのが、両グループとも約50%を占めており、予想より意外に少ない。大学生活では、やらなければならないこと、やりたいことがたくさんあってこのような結果になっていると思う。

iii 個人のライフスタイル

18 現代女性に一番欠けているものは何だと思いますか。

- (1)優しさ (2)気配り (3)教養
 (4)現実性 (5)経済力 (6)その他

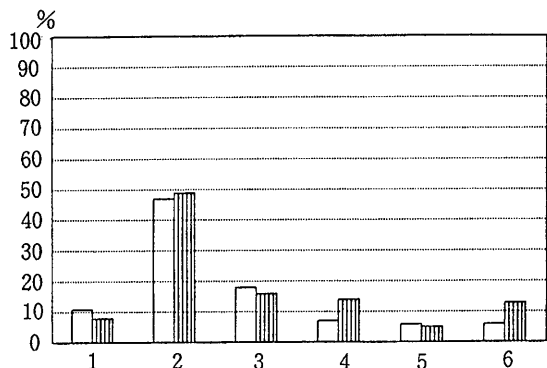


図8 現代女性に欠けているもの

現代女性に一番欠けているものとして、両グループとも“気配り”が約48%を占めている。現代社会において人間関係がドライになり、自己中心的な傾向を深めており、他人に対する気配りも欠けてきている。この調査結果は逆にいえば、気配りや思いやりが強く求められているといえる。

19どのような女性になりたいですか。

- (1)人を思いやるやさしい女性
- (2)夫を立て、おくゆかしい女性
- (3)仕事をバリバリするキャリアウーマン
- (4)子供の教育に熱心な教育ママ
- (5)つねに流行を追う飛んでいる女性

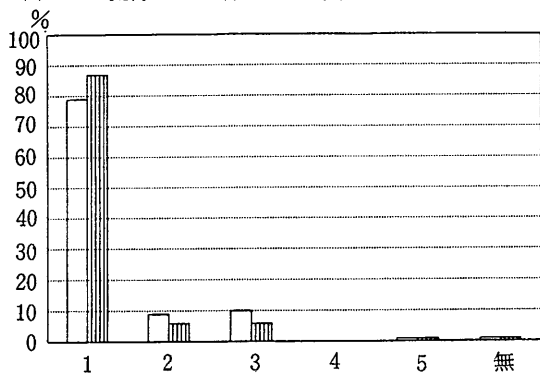


図9 どのような女性になりたいか

(18)の質問項目とも関連があると思われるが、“人を思いやるやさしい女性”が両グループともきわめて高く、79%~87%を占めている。それに対し、キャリアウーマンや教育ママ志向はきわめて少いが、これは調査対象が学生層であり、これらのことがまだ痛切に感じられてい

ないからだと思われる。

21友人とどんなことを一番話しますか。

- (1)勉強・学校
- (2)クラブ
- (3)友人関係
- (4)趣味
- (5)将来
- (6)芸能界、芸能人
- (7)その他

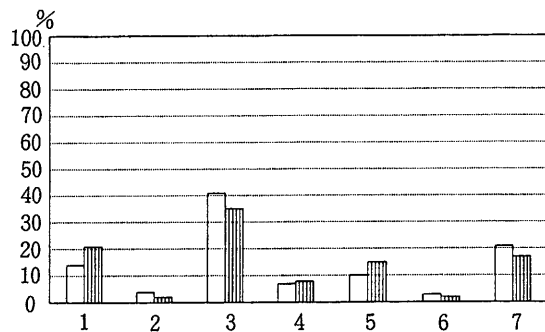


図10 友人との話

“友人関係”についてが最も多く、LG41%~HG35%を占めている。次いで“勉強、学校”についてがLG14%~HG21%となっている。大学生活の中では友人関係や学業に関することがやはり最も関心の高い分野であることを示している。

26新聞を毎日読みますか。

- (1)読む
- (2)気の向いた時だけ読む
- (3)読まない

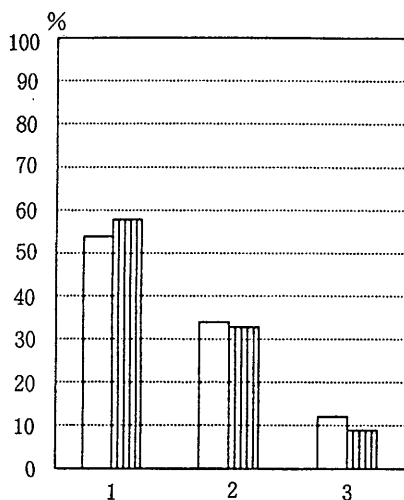


図11 毎日新聞を読むか

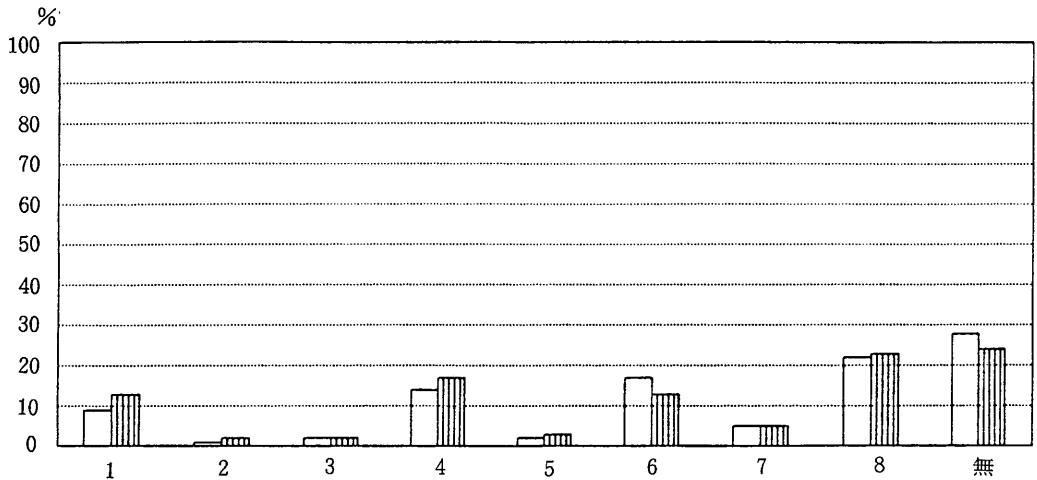


図12 新聞で一番読む欄

読むと答えた人は新聞で一番読む欄はどこですか。

- (1) 1面
- (2) 経済欄
- (3) 政治欄
- (4) 社会欄
- (5) 地方欄
- (6) 家庭欄
- (7) スポーツ欄
- (8) テレビ欄

(5)性格がよい (6)その他

新聞を毎日“読む”学生は約55%を占めているが、情報源としての新聞を読む比率はやや少ないように思われる。学生としても、社会、政治、経済の動きにも少し関心をもつべきであると思われる。読む欄としては“テレビ欄”、“社会欄”、“家庭欄”への関心が高い。

41男性がおしゃれをすることをどう思いますか。

- (1)美しくなりたいのは老若男女皆一緒に大いにやるべき
- (2)多少の興味関心はもつべきである
- (3)清潔であればよい
- (4)する必要はない
- (5)気にならない

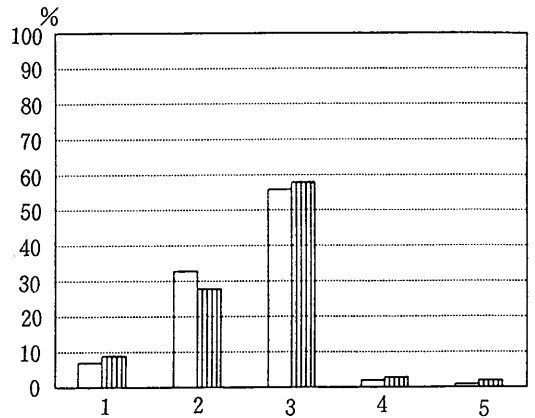


図13 男性のおしゃれをどう思うか

男性のおしゃれについては“清潔であればよい”が最も高く約57%を占めている。次いで“多少の興味関心をもつべきである”が約30%となっている。男性がおしゃれなど外見的にとらわれることは、あまりのぞんでいないが、多少の関心をもってほしいというところであろう。

42相手に何と言われるとうれしいですか。

- (1)美人 (かわいいね)
- (2)知的
- (3)個性的
- (4)社交性がある

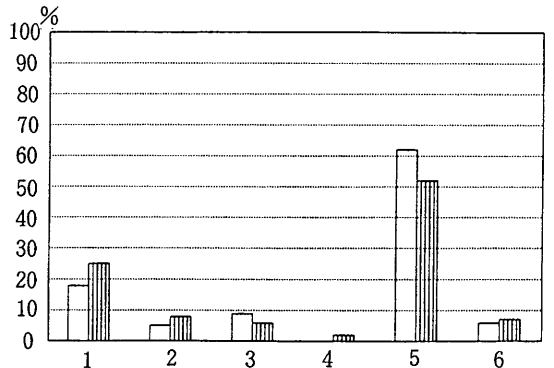


図14 相手に言われてうれしいこと

相手から言われてうれしいこととして、“性格がいい”がL G62%～H G52%を占め最も高い。外見のことより、内面的な人柄について言われることのほうがうれしいとしている。“知的”、“個性的”についての比率が低い点は少し意外であった。

iv 将来の生き方

44 結婚する相手に望む条件は何ですか

- (1) 経済的安定 (2) 優しくて思いやりのある人
- (3) 性格のよさ (4) 学歴
- (5) ハンサム (6) 家柄

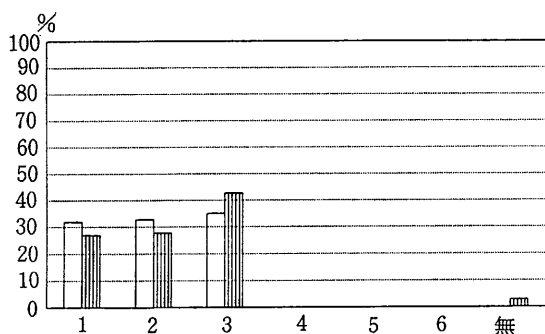


図15 結婚相手に望む条件

結婚相手に望む条件で最も高いのは、“性格のよさ”でL G35%～H G43%を占めている。(42)と同じようにここでも人格的な面が最も望まれている。“優しくて思いやりのある人”を加えると、約70%となり、内面的なことが強く望まれている。次いで、“経済的安定”が約30%を占めている。他の“学歴”や“ハンサム”などの外面的なことについてはあまりのぞまれていない。

45 理想とする結婚形態は何ですか。

- (1) 絶対恋愛結婚 (2) できれば恋愛結婚
- (3) 見合いのほうがよい (4) どんな形でもよい
- (5) 考えたことがない (6) 結婚したいと思わない
- (7) その他

結婚形態については“できれば恋愛結婚”が最も高く、約45%を占めている。結婚相手がいなければできないわけで、恋愛から結婚へという道が最も理想的であり、

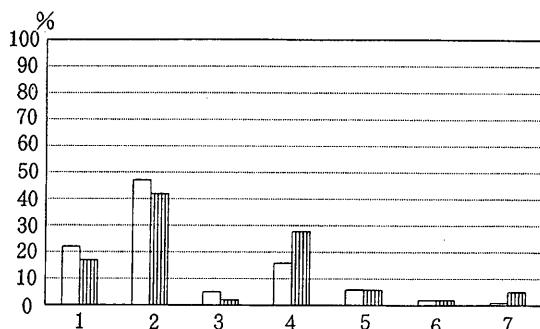


図16 理想とする結婚形態

“絶対恋愛結婚”とするものをかなり上回っている。次いで、“どんな形でもよい”とするものがL G16%～H G28%となっている。形態はどうであろうと、結婚によって幸せが得られることが大切であり、このような結果を示しているのは当然のことといえる。

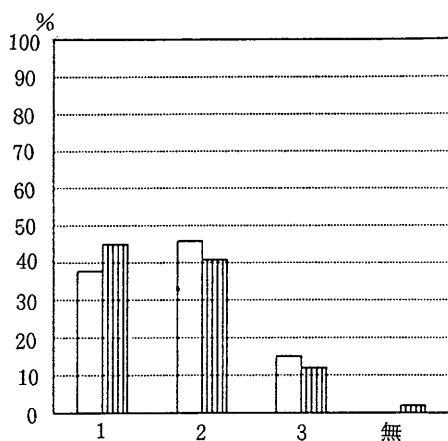


図17 結婚しても仕事を続けるか

48 結婚しても仕事を続けますか。

- (1) 続ける (2) 子どもが生まれるまで続ける
- (3) すぐにやめる

結婚しても仕事を続けるかについては約40%が、続けるとしており、“子どもが生まれるまで続ける”は約42%となっており、結婚後も仕事を続けるとするものが圧倒的に多いことがわかる。このような傾向は一般的であり、学生がそのように考えるのも当然なことといえる。

おわりに

以上の二つの調査は、現代青年の行動傾向把握のためのパイロット・スタディであるが、青年の行動傾向が現象的にある程度浮き彫りにされたように思われる。

未来社会を変えていくのはやはり青年であり、この調査をとおして得られた示唆を手がかりとして、望ましい教育環境の創出に向けて、さらに広範囲にわたる調査を継続研究として実施していきたいと考えている。

参考文献

1. 金平文二・岩井絹江：女子学生の意識についての調査—教育環境アセスメントに関する研究—第1報告 東京家政大学研究紀要, 24, pp. 49—69 (1984)
2. 金平文二・岩井絹江：人間成長過程における教育環境阻害要因の探策—教育環境アセスメントに関する研究—第2報告 東京家政大学研究紀要, 25, pp. 53—62 (1985)
3. 金平文二・岩井絹江：教育環境を阻害する各種要因の探策—教育環境アセスメントに関する研究—第3報告 東京家政大学研究紀要, 25, pp. 61—68 (1985)
4. 金平文二・岩井絹江：教育環境アセスメントに関する研究—第4報告 東京家政大学研究紀要, 26, pp. 141—147 (1986)
5. 金平文二・岩井絹江：青少年の問題行動についての分析—教育環境アセスメントに関する研究—第5報告 東京家政大学研究紀要, 27, pp. 91—96 (1987)